

苦難

知っておきたいキリスト教のことは (63)

苦難（苦しみ）や悲しみにはできるだけ遭いたくない、わたしたちはそう思います。また目の前に嫌なことが起こったりすると、何か悪いことをしたからだろうかと考えたりもします。

日本にも「因果応報」や「罰が当たる」という言い方がありますが、聖書にも同じようなことが多く書かれています。旧約聖書の民数記 14 章 1～38 節には、人間の罪に怒った神さまが疫病で人々を打つ場面が描かれます。



また新約聖書にも、目の見えない人を指して、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」（ヨハネ 9 章 2 節）と問う場面が出てきます。

しかし旧約のヨブ記にあるように、神の下に正しく生きようとする人が苦難にあう場面も描かれています。そのことからしばしば、苦難は神さまがわたしたちを教育するための手段として捉えられてもきました。

イエス様は、苦難のしもべとして十字架に向かわれました。このときの苦難は、わたしたちの罪を赦すために必要なものでした。すなわちイエス様はご自身を、罪を贖ういけにえとしてささげられたということです。

イエス様を信じる人は、この十字架にあずかることで、神さまの栄光のうちに入れられるのです。生きていく中で、様々な苦難が襲ってきます。イエス様を信じて、苦難がなくなることはありません。しかし神さまはわたしたちを包み込んでくださるということ信じ、歩んでいきたいと思えます。

「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」（コリントの信徒への手紙一 10 章 13 節）

次回は「クリスマス」です。お楽しみに。